高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

ごあいさつ

現代龍馬学会会長
宮　英司

昨年の現代龍馬学会総会において第3代の会長に就任いたしました宮英司（みや・えいじ）と申します。本文にもありますように、中学校の教員をしていました。今は幼稚園長として勤務する傍ら、大学の非常勤講師などをしています。会報に執筆する機会をいただきましたので、職業柄考えていたことなどを少し綴ってみたいと思います。

以下は、平成24年1月に当時の文部科学大臣あてに郵送した「歴史学習における坂本龍馬の位置づけについて」という手紙です。

その後、私の動きを知った会員の方からのご意見で、ほぼ同様の文面を当時の会長さんと館長さんの連名で改めて文科大臣に手紙を出すということもしたように思います。ただ、昨年発表された新しい学習指導要領では、格別の変化もなく、平成元年から続く42名の歴史上の人物もそのまま踏襲されたようです。

いろいろな考え方があるだろうとは思いますが、少しは当方の言い分にも耳を傾けてくださる方が文部科学省内にも出現することを願って、諦めずに意見を届けていくことが大切かな…と改めて考えています。

ところで現代龍馬学会に集う皆様方には、「様々な場面を通して（『龍馬のひろば』も含めて）会員相互の交流を深めていきましょう」と呼びかけをさせていただきまして、ご挨拶といたします。

＊

あけましておめでとうございます。

ご就任直後のご多忙の折に、突然のお便りを開封していただきましてありがとうございます。私は長年、高知県の中学校におきまして教壇に立ち、社会科の指導をしてきた者です。平成22年3月31日を持ちまして、現役を退き、今は国立大学法人高知大学教育学部におきまして非常勤講師を務めています。

中学校長の折には、高知県社会科教育研究会長を7年間、全国中学校社会科教育研究会副会長を6年間務めました。また、最後の1年は、全日本中学校長会副会長を務めまして、全国の教育研究活動の推進に尽力してまいりました。

今回、文部科学大臣様にお願いしたいのは下記の42名の歴史上の人物についてお目通しいただきたいということです。

卑弥呼、聖徳太子、小野妹子、中大兄皇子、中臣鎌足、聖武天皇、行基、鑑真、藤原道長、紫式部、清少納言、平清盛、源頼朝、源義経、北条時宗、足利義満、足利義政、雪舟、ザビエル、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、徳川家光、近松門左衛門、歌川（安藤）広重、本居宣長、杉田玄白、伊能忠敬、ペリー、勝海舟、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、明治天皇、福沢諭吉、大隈重信、板垣退助、伊藤博文、陸奥宗光、東郷平八郎、小村寿太郎、野口英世

これは、小学校学習指導要領の社会科6学年の学習内容の取扱いで示されています。そして、「例えば、次に掲げる人物を取り上げ、人物の働きを通して学習できるように指導すること。」とされています。この42名の表記は長年変わっていないように思います。また、当然のことながら、中学校の歴史学習にも大きな影響を与えているものと思われます。

このことに異を唱えるものではありませんが、ここに坂本龍馬の名前が入っていなくていいのでしょうか。申すまでもなく、坂本龍馬の業績としては薩長同盟の締結への尽力と大政奉還の実現に向けての側面的支援等々の日本史上の分岐点ともいうべき大きな働きが挙げられます。

この点については、高知市教育委員会発行の「小中学生のための坂本龍馬物語」において次のように述べられています。

「薩長同盟」がなければ、徳川幕府を倒すことができなかったわけですから、明治維新のもとは、龍馬がそれをつくったと言えると思います。しかも、龍馬は、武力を使わないで、後藤象二郎を通じて、将軍を説得し、平和のうちに政治の実権を明治維新政府にひきわたさせたのです。この「大政奉還」のようなことは、世界の歴史にも例がありません。

まさに、この高知市教育委員会の副読本の表現の通りだと思います。つまり、坂本龍馬の業績は、上記の42名に決して劣っていないばかりでなく、むしろ傑出しているとも考えます。日本の歴史学習において、坂本龍馬がもっともっと大きくとりあげられて然るべきだと考えます。そのためにも、小学校学習指導要領の社会科6学年の学習内容の取扱いにつきまして、将来的な見直しをお願いいたしたく、不躾なお手紙を書かせていただきました。

文部科学大臣様におかれましては、激務の毎日のことと推察いたしますが、どうか健康第一でお過ごしください。そして、次の学習指導要領の改訂の際に坂本龍馬が位置づけられますようよろしくお願い申しあげまして、この手紙を終りにさせていただきます。

（追伸）「小中学生のための坂本龍馬物語」を贈呈させていただきます。

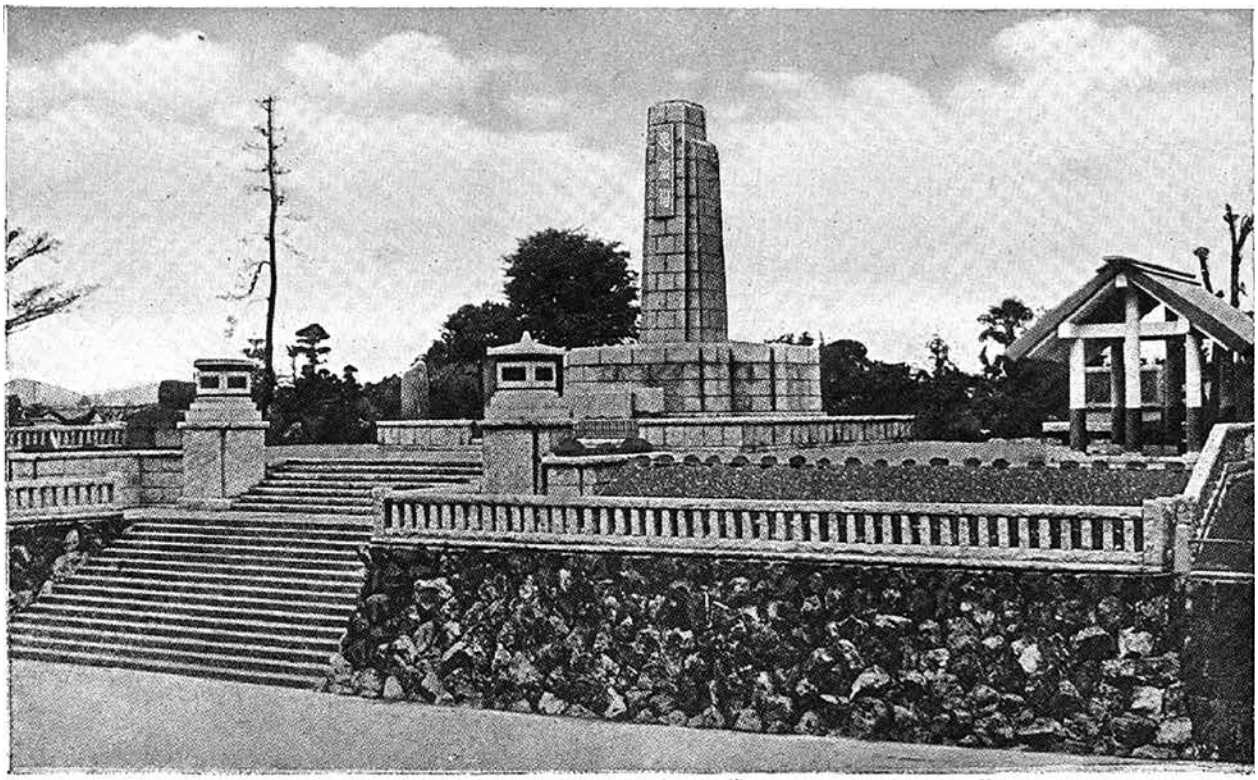
私のテーマ

柳原にあった「龍馬彰勲碑」と「忠魂護皇基」

今井　章博

桂浜の龍馬の銅像から少し西に下ったところに「龍馬彰勲碑」と細川潤次郎の歌が刻まれた「忠魂護皇基」の歌碑があります。これらは、もとは柳原に設置されていたことが、坂本龍馬記念館制作パネル「故阪本龍馬先生彰勲碑と忠魂護皇基の歌碑」に坂本源三郎氏の娘宍戸茂さんの後日談として記されています。

では、柳原のどこに設置され、いつ移設されたのでしょうか。月刊誌・『高知縣人』（昭和54年1月号）に有光次郎氏が書かれた「恩師をめぐる一挿話」によると「柳原公園の西端忠霊墓地の隣に建てられた」とあります。移設時期について「詮議の末坂本龍馬の銅像建設を機会に桂浜へ移されている」とあることから龍馬の銅像が建設された昭和3年5月以降に移されたものと思われます。ただ、移設の時期については、判然としません。田中貢太郎の随筆『杖頭銭』の「南国行」では「龍頭岬の丘にならうとした處の路ぶちに茶店がめって海援亭と云ってゐた。其處に知りあひの老人がゐて、銅像のまはりを掃除するとともに、茶店の上になった桂月先生の記念碑の掃除もしてくれるので、私は帰って桂月先生の紀念碑を參詣するたびに、海援亭で酒と肴を求め、それを莚といっしょに記念碑の傍まで運んでもらって、まづ記念碑に一ぱいの酒を供へ、それから心ゆくばかり桂月先生をしのぶことにしてゐた。」（昭和9年8月）とあり、彰勲碑には触れられていません。



高知市忠霊塔　高サ十一米三　財團法人大日本忠霊顕彰會

上の絵葉書は、戦前の柳原の忠霊塔の写真です。ここにはもう彰勲碑等は見当たりません。忠霊塔の左に石碑が見えますが、これは一部破損しているものの現存している「義勇奉公碑」です。書家の西森真太郎（鉄研）の撰文があり、日付は、明治40年9月とありますので、内容からも日露戦争時に高知から出兵した方々の戦没

慰霊のために建碑されたことが分ります。龍馬彰勲碑等はこの左右どちらかに設置されていたものと思われます。絵葉書の大日本忠霊顕彰会の発足は昭和14（1939）年7月で、撮影されたのはその後ということになりますが、撮影時にはすでに移設ずみであったようです。

肝心の彰勲碑ですが、その来歴が、大正5年11月5日付『土陽新聞』に載っています。

「香美郡東川村末延元吉氏は当年七十九歳の高齢なるが石工を業とし居れるも維新の志士坂本龍馬先生を崇拝すること甚だしく、未だ同先生の碑が県地の何れにも一ヶ所もこれなきを慨し、本年は来る十五日京都霊山にて五十年祭典の挙行せらるるを機とし、殊勝にも建碑を計画し、（略）碑へ板垣、土方両伯の碑銘を請ひたるものを建造し、更に（略）正二位男爵細川潤次郎氏が坂本龍馬が昭憲皇后御夢に入りしを詠ぜし『とこしへに国守るらん亡き魂もきさいの宮のゆめにちかひて』と刻せるを建造し」たとあります。

また、碑の完成にあたっては盛大なセレモニーが催されました。

「（碑は）十二日午後二時（略）高知公園より柳原まで曳かしめ十三、十四両日建立に掛り十五日盛大なる余興を催す由」「12日の日曜に海南もしくは商業校の生徒これを曳き柳原に建つる筈なるにより、藤崎市長は末延氏の快挙を奇特とし之を壮ならしめんと当市の侠客鬼頭良之助氏に諮りしにより、鬼頭氏の斡旋にて愈々15日午前10時を期し、大貞観遊両楼芸妓は屋台に投げ餅を曳くこととなり、尚ほ当日の奉納演武として柔道、鋲剣あり、当日柳原付近は賑ふとなるべし」（大正5年11月11日付『土陽新聞』）と碑にも名前が刻まれている鬼頭良之助氏の斡旋により建碑イベントが催されたという記載があります。

この碑に刻字した末延元吉氏ですが、「坂本龍馬先生の為に記念碑を建立する可く東川村より七八十日の間日々柳原に通ひ遂に独力を以て之を完成（略）去月二十八日上京して床次内務大臣を訪ひ板垣伯、細川男等を訪ふて時勢を談じ」たようです。（大正8年6月12日付『土陽新聞』）また、末延氏は、神社等に種々の建造物を寄進したことなどにより、大正6年に香美郡長から、表彰を受けています。

以上新聞記事から、彰勲碑が柳原に建碑されたのが、大正5年11月15日。その日には、京都で「坂本中岡両先生50年祭」が執り行われています。それに合わせて高知でも関連イベントを開催しようと彰勲碑の建設が企画され、15日の式典に合わせて建碑されたもののようです。京都の式典には田中光顕とともに藤崎高知市長も臨席しています。

彰勲碑には、板垣の撰文があり、前述の宍戸茂さんの後日談によれば、板垣に直接依頼したのは、父君の源三郎氏のようで「源三郎から、板垣退助氏のところへ撰文を書いていただいたお礼に行くように言われ、ある日手土産を持って板垣宅を訪れました。」と回顧されています。板垣の撰文は興味深く、「当時予ハ君ノ刎頸（ふんけい）ノ同士タル中岡慎太郎ト交リ俱ニ討幕ノ議ヲ決シ西郷隆盛君ヲ訪フテ死ヲ誓フテ挙兵ヲ約セリ」と龍馬とは直接接点はなかったようです。

龍馬の殺害現場にも駆けつけた田中光顕ですが、彰勲碑の建碑があった大正5年時、撰文を書いた板垣は80歳、「東奔西走…」の漢詩を書いた土方久元は84歳、和歌の細川潤次郎は、83歳と長老組が健在で、74歳の田中はこれら元勲の中では若手で、どうも出る幕がなかったようです。

現在桂浜にある坂本龍馬彰勲碑

細川潤次郎の龍馬をうたった歌碑には「とこしへに國守るらんなき魂も皇后（きさい）の宮のゆめに誓ひて」が刻されています。「皇后（きさい）の宮のゆめ」とは、日露開戦前の明治37年2月に龍馬が昭憲皇太后の夢枕に立ち「ロシアとの戦争が始まれば、日本海軍を全面的に保護するといい、消え去った」というニュースが明治37年4月13日の『時事新報』に報じられたことに起因します。その後、日本海戦に勝利したことで、龍馬の名声はさらに上がりました。三条実美が詠んだ「武士のそのたましひやたまちはふ神となりても国を守るらむ」を受けて詠まれたものと思われます。

龍馬の銅像とともに制作された阪妻の「阪本龍馬」のラストシーンで刺客に襲われ致命傷を負い、目の見えなくなった龍馬が中岡慎太郎に向い、「皇居は?」と叫び、中岡が皇居の方を向かせるシーンがありますが、この一連の流れを考えると、龍馬の像が皇居の方を向いていることも頷けます。

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（三十五）―

日本人のお名前 ― 幕末編 ―

宮川　禎一

某公共放送の日本人の名前を題材にしたバラエティ番組を毎回楽しく視ている。そんな変わった苗字があるのか!?といつも驚く。そのルーツを探るところも興味深い。

幕末史にも何人か不思議な苗字をもつひとが出てくるが、毛受鹿之助という名前の越前藩士がそのひとりだ。最初は「けうけ?」などと読んで失礼したが、「めんじゅ（めんじょ）」と云うとは知らなかった。この毛受鹿之助は中根雪江や三岡八郎とともに慶応三年十二月に京都で新政府の参与となった人物だ。

しかし歴史を遡れば「毛受」という苗字の有名人がすでに居た。戦国時代、柴田勝家の家臣で、天正十一年の賤ヶ岳の合戦で敗色濃厚となった際に、主君勝家を北ノ庄城へ逃すために、身代わりとして奮戦して死んだ毛受勝助（弟）と毛受茂左衛門（兄）兄弟である。主君に忠義を尽くした家来の鑑として賞賛されてきた。毛受兄弟が討死した古戦場は滋賀県長浜市木之本町の山麓にあたる。明治九年には滋賀県令の籠手田安定（この人も珍姓だ）が彼らの墓碑を建立した。さらに昭和になって愛知県在住の毛受一族もそこに石碑を建てている。幕末の武家ならば越前松平家に「毛受」という家臣がいることに感慨を持ったはずである。

龍馬の師、勝海舟先生も珍しい苗字だ。親父の小吉が養子に入って継いだ旗本の家である。慶応二年に大坂へやってきた勝海舟が多忙な本務の合間に祖先の地である「江州勝村」に使いを遣って云々、というような記述が『海舟日記』にあったはずだ。勝の御先祖は近江国坂田郡に発し、三河に移ったのち、天正年間に徳川家康に仕えた。江戸時代にはほぼ無名で小禄の旗本に過ぎなかったが、幕末に勝海舟が出て有名になったのだ。その勝先生が自分の家のルーツを気にかけて近江まで使いを出して訪ねさせたところが面白い。

勝海舟の祖先の地「江州勝村」は現在の滋賀県長浜市勝町にあたる。長浜城からも遠くない。もとは農村だったが、今は市街地となり、面影はない。写真を撮ったので、ちょうとだけ勝先生の気分を味わっていただきたい。

「ここは勝町です」の看板

コラム・龍馬のこと

「愛媛県大洲市と坂本龍馬」

坂本　世津夫

愛媛県大洲市長浜町は、文久二年の春、坂本龍馬が土佐を脱藩した時に宿泊した港町である。四年前から愛媛大学の仕事（南予の地域連携コーディネーター）をしている。仕事上では龍馬のことはあまり意識たことはないが、ただ毎週のように龍馬が脱藩した時と同じルートで、実家のある高知県南国市領石から愛媛県西予市宇和町を往復している。片道百五十キロメートルである（通称、仏像構造線ルートと銘々している）。龍馬の時代と若干違うのは、現在は国道一九七号線（通称「行くな酷道」）があり、片道二時間半程で移動できる。途中の津野町では、有名な通称「与作国道」と交叉している。龍馬が脱藩した時は、三月二十四日に高知を出て二十七日に長浜に到着しているから四日間かかったのであるが、今はわずかに二時間半である（超快適）。実家のある領石は、坂本龍馬の先祖が住んでいた才谷の入口付近に位置する。我が先祖にも文久二年、文久三年に亡くなった者がいるが、先祖まつりなどで龍馬とも会ったのではないかと妄想している。大学の仕事は、南予（自治体や企業など）の課題を大学と連携させて解決する仕組みを構築することであるが、昨年から大洲市肱川町の取り組み（観光開発と特産品開発）に係わっている（肱川プロジェクト）。そして、今年の夏からは大洲市長浜でも観光開発、特産品開発を行っている。観光のテーマは、やはり「坂本龍馬」である。長浜には、龍馬が滞在した冨屋金兵衛邸がある。また、肱川町の「肱川風の博物館・歌麿館」には龍のコレクションがある。肱川流域は、龍との縁が非常に深い地域である。是非、多くの皆様にお越し頂きたい。

冨屋金兵衛邸　https://www.tomiyakinbe.com/

第２回
「龍馬のひろば」の原稿募集について

主　題　**「龍馬に関する図書で、あなたの愛読書は何でしょうか？」**

今回は、みなさんの龍馬に関する愛読書の中で、「一押し」の作品についての情報を交流し合おう…ということになりました。申し訳ないですが、司馬遼太郎先生の「龍馬がゆく」については全員が書くことになりかねませんので、敢えて今回は除外させていただきます。

たくさんの図書の情報交換を通じて、会員のみなさんにとって初めての図書との出会いがあることを願っています。そして、みなさんが記述された「好きな理由」を読むことで、龍馬の新しい魅力を発見することにつながるのではないかと期待しています。

(i)図書名
(ii)発行所
(iii)好きな理由

(※)今回は司馬遼太郎作品を除外しての募集です。
(※)締め切り…平成30年11月15日(木)
(※)文字数…200字

参加ご希望の方は現代龍馬学会事務局までお申込みください。

【お申込み・お問合せ】
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会事務局
電　話　088-841-0001　　ＦＡＸ　088-841-0015
ＭＡＩＬ　gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL (088) 841-0001　FAX (088) 841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp